

僕たちは愛するけれど

小川未明

青空文庫

「まこと誠さんおいでよ、ねこの子がいるから。」と、二郎さんが、染

め物屋ものやの原はらっぱで叫さけびました。

まこと

誠さんにつづいて、二、三人の子供こどもらが走はしつてゆきますと、紙

みばこなか

箱の中に二ひきのねこの子こがはいっていました。

「だれか、捨すてたんだね。」

はしうえ

「橋の上に置おいてあつたのを、三びきジョンが食くい殺ころしたのだ。」

わる

「悪いジョンだね、いじめてやろうか。」と、誠まことさんや、正しょうちや

んがいました。

しげる

「茂しげるさんが怒おこつて、ジョンを河かわの中なかへ突つき落おとしたんだよ、ジョ

ンのやつ、クンクンないて逃にげていつてしまった。」と、二郎じろうさ

んが、告げました。

「かわいらしいね。」と、新ちゃんや、年ちゃんが、ねこの前にしゃがんで、頭をなでてやりました。

「おなかが空いているから鳴くのだろう。」

「僕、ご飯を持ってきてやるから。」

新ちゃんは、家へ駆け出してゆきました。ご飯にかつお節をかけて、おさらに入れて持ってきました。一ぴきは、小さな頭を振って食べました。一ぴきは、箱のすみでふるえていました。

「かわいいそうだね。」と、誠さんが、二ひきの子ねを見ながらいいました。

「晩に雨が降れば死んでしまうね。」

「僕^{ぼく}たち、雨^{あめ}の当^あたらないうように、お家^{うち}を造^{つく}ってやろうか。」と、年^{とし}ちゃんがいいました。

「そんなことをしたって、だめだよ。それよりか、だれか飼^かつてくれないかな。」と、二^{じろう}郎^{ろう}さんが、いいました。

「だれか、飼^かつてくれるといいね。」と、誠^{まこと}さんが、二^{じろう}郎^{ろう}さんの言^{ことば}葉^{どうい}に同^{どう}意^いしました。

「新^{しん}ち^{うち}ゃんの家^{うち}では、飼^かわない？」

「僕^{ぼく}のうちでは、お母^{かあ}さんが、ねこをきらいだよ。」と、新^{しん}ち^ちゃ

んは、答^{こた}えました。

「君^{きみ}のうちでは？」と、誠^{まこと}さんが、二^{じろう}郎^{ろう}さんにききました。

「僕^{ぼく}のうちには、一^{いっ}び^びきねこがいるじゃないか。」

「あの、大きいきつね色いろのどらねこは、君きみんちのかい。」

「ああ、そうさ。」

これをきくと、みんなが笑わらいました。

「あのくりの木きに、かぶとむしがいる！」

このとき、あちらで、だれかいった声こえがすると、みんなは、その方ほうにかけていってしまいました。あとには、二郎じろうさんと誠まことさん、二人ふたりだけが残のこって、子ねこをどうしたらいいものかと相談そうだんしていました。

「どこかで飼かってくれないか、方々ほうぼうきいてみようか。」

「そうだ。きいてみようよ、飼かってくれる家うちがあるかもしれないからね。」

まこと
誠さんは、子ねこの入っている紙箱を抱きました。二郎さん
は、先さきになつて、町まちへ出るとあちら、こちらながめました。あち
らに、お菓子屋かしやのきみ子さんがいました。いつかいじめたので、
二郎さんじろうは、顔かおの四角かくな、鼻はなのどがった父親ちちおやからしかれたこ
とがあります。しかし、いまはそんなことをいつている場合ばあいでな
いから、

「きみ子こさん、ねこの子こを一ぴき飼かつてくれない？」と、二郎さ
んが、いいました。

「わたし、ねこ大好きだいすよ。家うちへいつてきいてみてくるわ。」とい
つて、かけ出だしてゆきました。

「あいつ、ときどき生意気なまいきなんだよ。」

「だけど、ねこを飼^かつてくれたらいいね。」

そこへ、きみ子^こさんは、顔^{かお}を赤^{あか}くしてもどつてきました。

「お母^{かあ}さんが、飼^かつてやるつて。」

「それは、ありがとう。」と、誠^{まこと}さんは、箱^{はこ}の中^{なか}から、一ぴきと
り出^だして、

「これがいいだろう。」と、きみ子^こさんにききました。黒^{くろ}と白^{しろ}の
ぶちのかわいらしいやつです。きみ子^こさんがねこを抱^だいてゆくと、
誠^{まこと}さん^{じろう}も二郎^{じろう}さん^{まこと}もいっしょにゆきました。

ぎゆうにゆう

「牛^{ぎゆう}乳^{にゅう}をやつておくれ。」と、誠^{まこと}さんが、いいました。二人^{ふたり}

よろこ

は、喜^{よろこ}んでそこから出^でると、

「もう、あと一ぴきだ。」といいました。けれど、一ぴきもらい

手があつたことは、どんなに二人を勇気づけたでしょうか。

荒物屋の前に、若いお婆さんが、赤ちゃんを抱いていました。

なんと思つたか誠さんは、そのそばへいつて、

「お婆さん、このねこの子を飼つてやってくださいませんか。」
と、頼みました。

赤ちゃんは、子ねこを見て、きやつ、きやつといつて、喜びま

した。二郎さんは、赤ちゃんの喜ぶのを見て、自分も笑つて、赤

ちゃんに見とれていました。

「まあ、かわいい子ねこですね。この子が喜びますから、飼つて

やりますわ。」

お婆さんは、お家へ入りました。あとについて、二郎さんと誠

さんが入りました。

「どうもありがとう。」と、おばさんにお礼をいわれて、二人は、げんきよく外へ出ると、急に明るく感じました。

「よかったね。」

こういつて、顔を見合わせて、につこりしました。このとき、あちらからきみ子さんが、さっきの子ねを抱いてやってきました。

「どうしたの？」

「お父さんが帰って、いけないとしかつたの。」

「だめだというのかい。」

「お父さんが、返してこいというの。」

二郎^{じろう}さんは、ひつたくるようにねこを受け取りながら、

「やな親父^{おやじ}だな、飼^かつてもらわなくていいよ。」といいました。

この権幕^{けんまく}におそれ、きみ子^こさんは、逃^にげていつてしまいました。

「どうせ、こんなことだろうと思^{おも}った。」と、二郎^{じろう}さんが、いいました。

「僕^{ぼく}、うちへ持^もつていつて、お母^{かあ}さんに願^{ねが}つてみよう。」と、誠^{まこと}さんが、決^{けつ}心^{しん}を顔^{かお}に表^{あらわ}して、いいました。

「そうかい、お母^{かあ}さんにお願^{ねが}いしておくれよ。」

二郎^{じろう}さんは、安^{あん}心^{しん}して、別^{わか}れて帰^{かえ}りました。誠^{まこと}さんは、家^{うち}へ

帰^{かえ}つて、お母^{かあ}さんにいままでのことを話^{はな}しました。そばでこれを

きいていた、お姉^{ねえ}さんが、

「お母^{かあ}さん、飼^かつてやりましょうよ。」と、口^{くち}を添^そえてくれました。

「おまえさんに、そのめんどろができますか。」と、お母^{かあ}さんは、おっしやいました。

「僕^{ぼく}、かならずめんどろをみてやります。」と、誠^{まこと}さんが答^{こた}えました。

その晩^{ばん}であります。お父^{とう}さんがお帰^{かえ}りになつたので、ねこの話^{はなし}をすると、

「誠^{まこと}や、お友^{とも}だちに大骨^{おおほね}おりをかけた、ねこをつれてきてお見^みせなさい。」と、お父^{とう}さんは、笑^{わら}つて、おっしやいました。誠^{まこと}さ

んはすぐ抱^だいてきて、

「お父^{とう}さん、これです、かわいいねこでしょう。」

お父^{とう}さんは、子^こねこを抱^だいて、ごらんなさったが、急^{きゆう}に、まじめな顔^{かお}をして、

「なんだ、これは雌^{めす}でないか。」と、おつしやいました。

「雌^{めす}ですか、雌^{めす}だつていいや。」と、誠^{まこと}さんがいいました。

「それは、だめだ。一^{こま}ぴきやるのにも、もらい手^てがなくて、そんなに困^{こま}るのに、毎^{まい}年^{ねん}、春^{はる}秋^{あき}幾^{いく}ひきも子^こ供^{ども}を産^うんだらどうするつもりです。やはり、しかたがないから、そのたびに捨^すてなくてはなりません。だから、はじめから飼^かわんほうがいいのです。」

誠^{まこと}さんは、お父^{とう}さんのおつしやることをきくと、なるほどそう

かもしれないと思いましたが、いまさら、この子ねこをどうするわけにもいきませんでした。

「お父さん、そんなことをいつても、このねこを捨てれば、死んでしまえますよ。僕、そんなことはできません。」といいました。「困ったなあ。」と、お父さんは、考えていられました。ちょうど、そこへ、米屋さんが、

「たいそう、おそくなりまして。」といつて、お米をとどけにきて、この話をききますと、

「雌でもかまいませんから、私にくださいませんか、ねずみがいでしょうがないのです。」といつて、とうとう米屋さんが、ふところに入れて帰りました。

まこと
誠さんは、やっとこれで思いを達して、喜びましたが、こんど
のことで、僕^{ぼく}たちは、ほんとうに愛^{あい}するけれど、大人^{おとな}たちは、生
きている動物^{どうぶつ}をかわいそうに思い、かわいがるというよりか、
気^きまぐれや、都合^{つごう}で、飼^かったり、また捨^すてたりしていることを知
りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「子供テキスト」

1934（昭和9）年10月

※表題は底本では、「僕《ぼく》たちは愛《あい》するけれど」
となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年5月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

僕たちは愛するけれど

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>